

# 太 棹



第百三十四號

陣屋の熊  
信二

昭和十六年三月廿八日  
第三種郵便物認可

昭和十七年四月廿三日  
昭和十七年四月廿五日  
印刷納本 發行

(毎月一回)  
廿五頁發行

太棹 (第百三十四號)

野澤道之助待合を始めた  
三度に一度は行かざるまい

ズンペラ〜

向島にて十六島田が出て来てビスア  
酒も梅よし行かざるまい

ズンペラ〜

本所區向島須崎町九五

御待合 梅 よし

電話墨田シナイ四七五番

水 島 春 枝

道順 (須崎町電停より半丁先交番前電車  
通りを左へ入り右へ曲つて二軒目)

淺草區雷門二丁目一九

淺草宅 野澤道之助

電話淺草ミナ三七九番

幸 松

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番  
二〇〇〇番

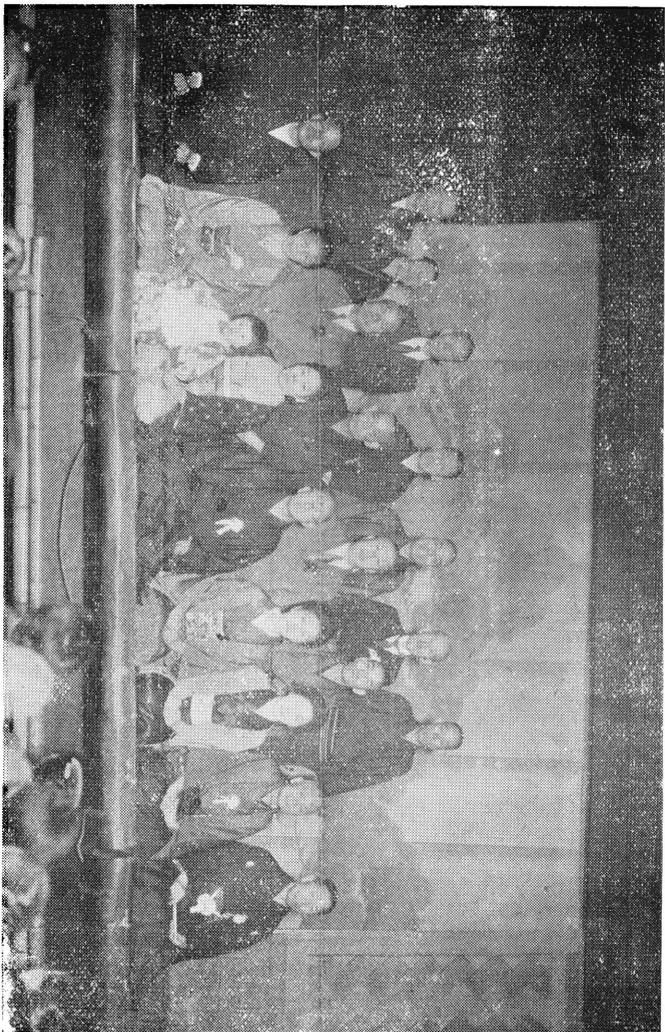
風流・金ふら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八  
電銀二〇八

# 東都聲義會主催百選會發會記念

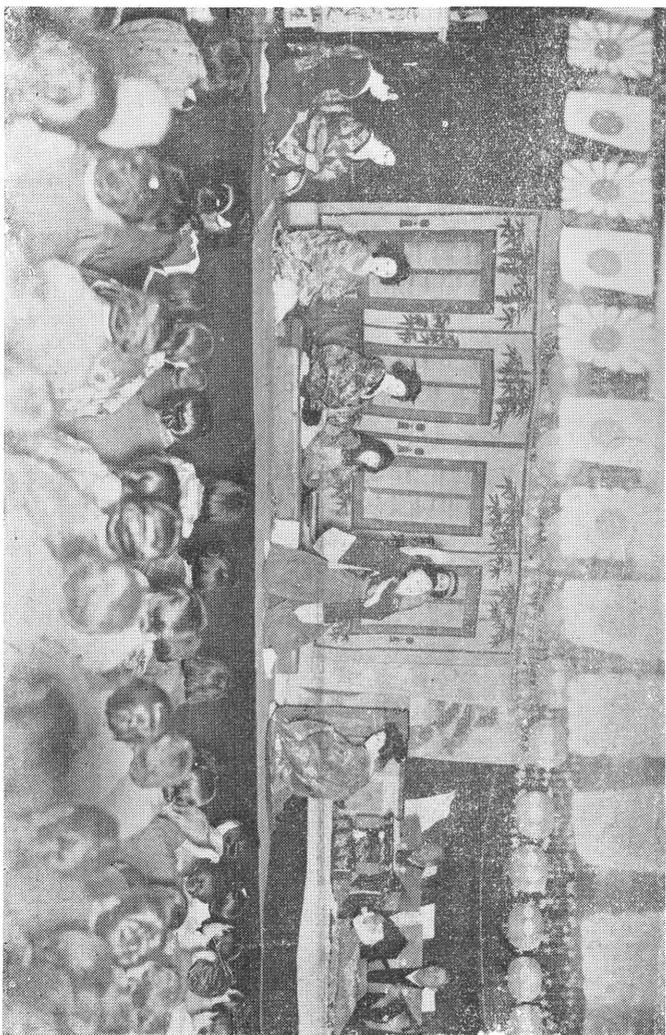


齋藤金太郎（山生）氏は東都聲義會々長に就任、同會の主催に依り「百選會」第一回が四月六、七兩日並木俱樂部に開催されました。（記事参照）

寫真前列向つて右より三堀ときわ、井上和風、竹本綾秀、竹本素女若、齋藤山生、黒川叶、神馬里芳。中列石川治光、嵐可光、乃村乃菊、高瀬一泉、後列二人目より、本城冠之、山田壽胤、豊澤猿藏、外山富彌の諸氏。他は床世話。

# 『祭荷稻』に於ける齋藤山生氏の先代萩

齋藤山生氏は、身振劇又は人形を附して浮瑠璃に依て日本精神を大衆に鼓吹すべく、これが目的を完遂せんが爲めに、目下人形の製作人形遣ひ養成等に盡せられてゐます。



寫眞は同氏經營の東京化學紙工所西新井工場内玉姫稻荷神社祭典の餘興に於ける齋藤山生氏と豊澤猿藏師・身振劇は坂東勝治一座。

# 故松林福笑氏



寫真下は松林福笑氏の故郷三重縣  
津市寺町屋松院に於ける松林家の  
墓地、墓標は故人福笑氏が生前中  
建立せられたるもの。

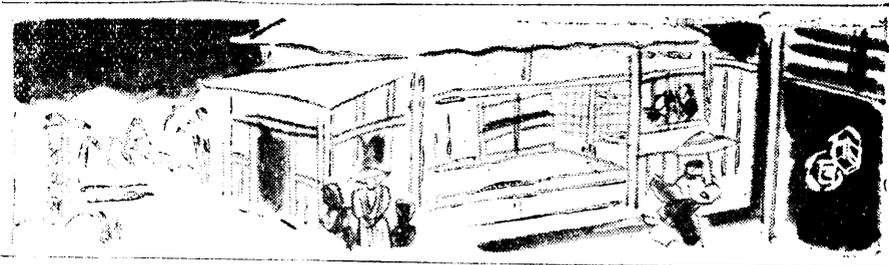


寫真は氏の五十歳記念、大正  
十五年三月の撮影である。

# 松林福笑氏追善義太夫會

一月二十日狭心症の爲め卒然逝去された松林福笑氏は既報の通り三重縣の出身にて、淨瑠璃は大阪の鶴澤廣榮、同玉助、同大系（後の燕四）東京では豊澤團左衛門、同團八等に就て修業四十二年に及び、世話物を最も得意として帝都素義界の重鎮であつた。四月二十九日は百ヶ日に相當するので二日前、十七日正午より並木俱樂部に於て、その追善義太夫會が催ほされ、最初讀經に次いで初手向朝顔日記を掛合で上演、次に歌澤を添手向として川口清子さんが寅之助の絃で、外合邦（天明、相生駒）帶屋（宮古、阿生駒）寺子屋（義

昌、和孝）封印切（子太郎、和孝）紙治前（玉華）同奥（勇昇、和孝）合邦（申次、和孝）柳（竹糸、相生駒）酒屋（筑波、相生駒）赤垣（叶、扇之助）新口（かなめ、都太夫）陣屋（二幸、松榮）彌作（いろは、松榮）松王郎（白猿、猿藏）沓掛（桔梗、綱助）四谷（靜翠、和孝）其他未だ語り物の決定しない柳蝶、淀橋愛米、我笑、里芳、近江、新七、上誠、三幸、佳世子紀文、海月、ひつじ、おそめ、秀玉、團壽、雷網、周樂の諸氏の外に多数出演を見る筈である。



太棹 第三百四十四號目次

太夫・三味線・人形……………紅雨莊主人(五)  
 因會の改組と其質的變化……………中山泰昌(一〇)  
 合邦雜感……………西尾福三郎(一五)  
 文樂人形小道具帖……………宮尾しげを(一八)

國心鼓舞の爲めに  
 『本誌』を提唱す……………伊藤紅二(二三)

人形頭取玉次郎の死……………齋藤拳三(三〇)  
 鸚鵡會と猿春會……………内田三千三(三三)  
 消息と會報……………(三三)  
 太棹社彙報……………(三五)

表紙・カツト……………齋藤清二郎

口繪 東都壁義會主催「百選會」・同齋藤山生氏の「先代萩」  
 故松林福笑氏

# 國心鼓舞の爲めに『本誌』を提唱す

伊 藤 紅 二

世は擧げて大東亞戰爭の完遂に一億一心の諧調を整へて一糸だも不揃のない歩みを運んでゐる。

而してこの歩みは實に永遠にも近い歩みと見なければならぬ位に、稱して世間では「長期戦云々」と稱してゐるが、こと程左様にこの戦ひはながびくことは一點の疑ひもなく、それだけに何が何でも勝ちぬく氣慨、否、決心、實行力が伴はねばならぬと思ふ。

其處で、殆んど半ば恒久的に近い戦争であるからには、之は實は從來の吾々の先人が抱懷した處の戦争觀では律し切れないもの、即ち、長期建設そのものと見ねばならぬ場合が多い様に思はれる。しかも長期にわたるものには必然的に恒久策、持久力養成、民力涵養、庶民厚生、而して之等を包含したる意味に於ける國民文化の昂揚が不可缺の問題として取扱はれねばならぬのであるが、扱て然らば、其の國民の文化意識を高める意味に於ての健全なる娛樂と云ふ様なものは果して何を選ぶべきかと云ふことが徹底的に考慮考究されねばならぬのである。

謂はば國民に慰樂と愉悅を興へると同時に其處に啓蒙力と指導性が期せずして要請せられ得るていのは果して可能なるやと云ふ段階になるのであるが、今ここでは其の詮議立ては稍迂遠の様に思はれるし、又其處から論じ出すと際限もなく廻りくどい話になるので、それは姑く預るとして、専らこの本筋に忠實なる論理の飛躍を敢てすることをゆるされるならば、かゝる健全娛樂が民衆を歡喜を通して、教化し能ふ尺度乃至は限界と云ふものゝ問題に歸着するものゝ如くである。

其處で、其の尺度や、限界も端的に具體的に云ふならばさしづめ國心をゆり動かすべきものでなくてはならぬことは云ふ迄もない。

況んや現下の狀勢に於て國體がいやが上にも明徴にされ、國民意識が、實に完膚なき迄に皇道に歸一し、億兆一心を顯現してゐる場合、この打つて一丸となつた力をかりに國力とするならば、それはまさに體當り戰法としての米英打倒のあの大戰果であり、過去數次の舉國の戰役の原動力でなくてはならぬ筈であると斷ずることも敢て早計ではない。

其の國力の核心は何か、之も今からに自分は「國心」と呼ぶのであるが、それは又大和魂とも云ひ得るだらう。然し、國心は何處迄も、形而上學的のものであつて眼にみえていものものではあり得ない。

之をつけ焼双的に考へては凡そ無意味に近いものになると思惟すべきである。

隨つて之には何處迄も、鼓舞 (inspire) する所のガソリンがなくては叶はない筈である。

云ふ所の焰々と燃えさかる所の原動力である。

それをしも、國民の糧と云ふ。健全なる國民娛樂の養原素である。

之を何に求めんとするか。それは人各々據り所あつて、多種多様であらうと思ふし、又然るべきものとは思ふが、國粹藝術の粹とも云ふべき義太夫や太棹の味と價值とは之となみして、健全娛樂は語れまいと斷言したくなるのである。

其の結論を生む迄には委曲をつくすべきことも多々あるし、又この結論を割り出す爲の説明も必要と思ふが、さしづめ常識的にのみ考へてみても義理人情を究め、武士道を長養鼓吹し、因果應報の理をあきらめる所謂、日本的世道人心の誘掖指導を眼目とする——尤も 其の發祥や展開に於て之を目的としたわけではないが國民性の自然と、其の藝術のもつ獨自性とがしからしめた——義太夫淨曲などが先づさし當り第一等に健全娛樂の極印を押さるべきは云ふをまたない所である。

○ 其處でここでも亦、論理を著しく飛躍させるのであるが、健全娛樂樹立の爲にはこうした文化財のこよなき生長を冀げねばならず、其の爲には其のよりよき指導者がなくてはならぬことを力説し度い。

其の意味に於て、淨曲界に於ては須らずドグマを押したる指導的地位の人を望み度い。然し、それはこうして摩擦相尅や因襲傳説の多い界限に於ては得てして望むべくもないし、否、望むべからずと云ふよりはむしろ望まざるが上策であつて、其の代りに指導機關の確立こそが喫緊事となる。

然らば、其の機關とは果して何か。

之は一にして足らずとするも、本誌の如き斯道の權威ある發表、研究機關も實に其の大半の責をもつものではなからうかと思ふ。

殊に、本誌責任者の言を聞けば、年何回には必ず、門外不出のしかも前人未踏の處女研究を掲載して、この道の爲に啓蒙を怠らぬとの事であればなほ更この感を深うする。

然らば、之を春秋の筆法をもつてすれば、まさに健全娛樂の生命を制するもの本誌にありてふ位の自負を持ちたいのである。

之は練りかへし云ふが大いにギャップのある論理の大飛躍を取てしてゐることではあるが、本誌推考の爲にこの位の怜持と自尊と自信とを持たしたのである。

○ 此處で本誌存續提唱の爲に筆を一轉して、雜誌出版統制にふねばならないのであるが、それはなまじひに數蛇のそしりをうけても困ることではあるし、又筆者自信も出版關係には些か關係を持つものであるが故に、或は天に向つて唾を吐く様なことにもなるのを恐れるので隨つて、云ふことに衣をきせたり、憶病になつたりするのやむない状態にあるのが如何にも口惜しい氣がする。云はば隔靴搔痒の感とでも云ふのであらう。

然し、そうしたハンデキャップを持つてしてもなほ且つ云はねばならぬことは、こうした國心を鼓舞長養すべき藝術の指導雜誌などに對しては、他の營利商業雜誌と同日に論じたり、同列な統制を強いてはならぬと云ふことである。秦の始皇帝ならいざ知らず、苟も具眼の有識者はこれの説明を必要とすまいが、この際世のどさくさに便乗するものゝ多い最中なるが故に殊更にこの言を大にしたいと敢て一文を草した次第である。



# 太夫・三味線・人形

紅 雨 莊 主 人

(一)

淨瑠璃、三味線、人形の、所謂三業とか三藝とか云ふものは、この道發生の殆んど最初から組合つて、今日の完成を見た譯であるが、これ等三藝相互の關係に就いて一般觀客層にも、また廣き意味での識者の間にも、時にはまた藝人自身の間にも、色々の見方や、取扱方を見るやうである。

此藝は、淨瑠璃が主であつて、三味線は従であり、人形は寧ろ附けたりであるといふ本來の約束は、今日に至るも變化は無い。三味線は無くとも、扇拍子でゞも淨瑠璃は語られ、人形に至つては、淨瑠璃無しには何うにもならぬ。獨立性が強い程地位は主となり、依存性が強い程従となり附けたりとなるのは當り前と云ひ得る。

併しこれは、三藝中の相互の地位に對する本來の約束であつて、主従と云つても夫婦の關係であり、附けたりと云つても日本繪に於ける色彩と同じで、威張つたり卑下したりする關係には居らず、飽くまでそれ／＼其所を

守つて、相扶け合ふといふ關係に立つ。相倚つて立つ所は鼎の三脚とも云ひ得るが、性質上鼎の三脚とは形が違ふ。適切ではないが、船と舵と帆との關係がまたそれに近い。

夫婦の關係であるから、夫唱婦和でなくてはならぬが男尊女卑ではない。牝鷄曉を告げても困るが、其稼ぎの汗みどろは素よりしかるべきであり、時に駿馬痴漢を乗せて走らぬとも限らぬが、駿馬と雖も逆に痴漢に騎るべきではなからう。豊澤、野澤、鶴澤と行き方がやゝ違ふとして、それは人の性分によつてよい夫婦にも色々あるやうなものであり、どちらにしてもこの約束を外れるものでない。人形との關係も同様であらう。

以上は藝本來の約束であつて、其内藝のよいのが三藝綜合の演出をリードする事になるのは、何事にも有る事で、へボの藝に上手が盲従せねばならぬ筈は無い。但しこれは樂屋裏の話で、木戸錢を取つて觀せる場面では、思ひ／＼では全體として藝にならぬ。テン／＼バラ／＼

でないやうに、リードするのを建前とするべき筈である  
(二)

以上は三藝に對する筆者の基本觀念であり、恐らく大多數の御意見でもあるかと思ふ。因に「人形淨瑠璃」といふ言葉は、三藝の主位に居る淨瑠璃の立場として不見識だから「淨瑠璃人形芝居」と云ふべしとの言が出て居り、確か新「櫓下」によつて採用されはしなかつたかとも思ふが、用語は定義次第のものではあるが、「人形淨瑠璃」と云へば常識的に「人形入淨瑠璃」と聞こえ、之に反して「淨瑠璃人形芝居」と云へば「淨瑠璃入人形芝居」と聞こえるやうな氣がして、寧ろ逆にならぬかと心配する。「淨瑠璃」を「人形」の上に置いて、淨瑠璃が主とならずに、「義太夫でやる人形の芝居」「説教等でやるのでない人形芝居」といふ風に、人形の方が主になる方の危険が有りはすまいか。「天ぶら蕎麥」は天ぶらが上に書いて有つても天ぶらの一種ではなくして蕎麥の一種である。

序に、櫓下の地位に三味線や人形を入れる事は右の主意から見て、原則としては面白くないと思ふ。亭主は少々鈍物でも、表札は主人のを一枚出しておく方が好ましい。もし藝の上下で極まるなら三味線や人形だけの櫓下が出来ぬと限らず、嬉天下は蔭介石や緩禪に任かせて置きたい。さう云へば英主相和爺菊兒だの、米國務卿野蔭だの、其他餓滅、眞赤悲等、祿な名が無い。それから見

れば樞軸側は東條など、下から讀んだつて上等な名で、火虎、武反仁から、敵か味方か分らんが、頑爺チャンバラ坊主だのイバリ坊主だの、印度だつて満更でない。

閑話休題、三藝の順序が右の通りであつても、どの藝を好くかは銘々の勝手であつて、この點、どの藝の藝人となるかといふのと同じと思ふ。多くの動物がさうであるやうに、牝は一般に敏感で頭が細かく、三藝の内でも三味線弾きには不器用者は始めから無理であるが、太夫には随分のツソリしてゐるのが有り、人形遣ひに至つては、一生足使ひなど、云ふ徹底したのが居る。しかし、學者も藝術家も商人も必要なので、文樂の觀客が先づ人形から這入るとしても、淨瑠璃だけ聞くのが通とも云ひかねる。要は藝に對する其人々の機縁、因縁の問題である。筆者としては淨瑠璃がよく語られて居る時には下手な人形は邪魔になり、上手でも蛇足になつたりするから人形は見ぬ事があるが、これも一番好きな藝を聞くと云ふだけで他意は無い。

淨瑠璃を愛撫するあまり、淨瑠璃は人形など勘定に入れず、独自の表現をして差支無いといふやうな説が、一部の有識階級の間には存在すると見え、或席上で議題にまでなり、熱心な支持論も出た事がある。これは其時の素語りの藝評に「人形の動き」など、云ふ言葉が出たのに對する反感とも思はれるが、此説は、淨瑠璃が人形と共に發達したものであり、其節付や表現が、凡て人形と合ふ

と云ふ前提で出来てゐるといふ現實の理解に乏しい事から起るものと思はれる。淨瑠璃の人物は人形であり、其表現が人形の約束である誇張や律動を基調とする事は、淨瑠璃を外からのみ見ず、中に這入つて少しく其機巧を精視すれば問題の無い所である。然らずとすれば、一體其藝術的表現の對照は、具體的に云へば何であるのか。

生きた人間なのか、論者理想の雲霧體なのか。新體制の新淨瑠璃の劃期的創造なら別とし、從來の意味による完成した藝術なる淨瑠璃ならば、八重垣姫はアツパツパの外踏みガールではならず、どこ迄も重い裾を引きすつて兩袖と兩脛で調子を取つて動く或物——人形——でなくてはならず、作曲も、語り方も、そのやうに出来て居る。これは、床は手摺に合はせると云ふ意味でない事は申す迄もない。合ふやうに出来てゐるものだと云ふので合はぬのはどちらかど悪いといふ事になる。或は兩方悪い場合があるかも知れぬ。

### (三)

吾々局外者が不思議に思ふ事は、此頃は淨瑠璃と三味線と合つて居らぬといふ事を、往々玄人仲間から聞く事である。成程さう云へば、太夫が位を付けてねち／＼やつてゐるのに對し、三味線は餘計な入れ撥と思はれるやうなものを入れてつないだり、或はもし／＼龜よの兎のやうに先廻りしては待合せて居たり、人形は人形で、有らゆる所作を仕盡して、愈々する事が無くなつて困つて

引込んだりする。名人の半時一時間淨瑠璃など、云ふのは昔の事であり、太夫と三味線とが鑛を削るなど、云ふ事も過去の夢になつたと見える。尤も三味線も、顔斗りで腕はもう老衰して賣物にならぬと樂屋の定評になつて居るとか云ふのが、雜誌などで褒め千切られたりするから、どちらがどうなのだか吾々にはよく分らぬ。しかし淨瑠璃と人形と合はぬ事は吾々の目にも見え、これが廣すぎる小屋、明る過ぎる舞臺と共に、今日の文樂の藝が兎角緊張を缺く大原因の一つを爲してゐるかに思はれる。昔の藝人と今の藝人との力の差は別とし、今日的小屋は普通の太夫の聲量で一杯にするのには餘りに廣過ぎ、後ろ迄通すだけに全力を要するから、細かい情を出したり、思ふさま減り張りを付けたりする事が困難になる舞臺の明るい事と出使ひの濫用とは、人形自身の陰影を薄くし、且つ人形と人形遣と背景との深みを無くして、人形は白晝夢の如く、鼓から引出された榮螺の如く、そのグロテスクな肢體を晃々たる照明の下に露出する事になつた。その結果は、淨瑠璃は容易には觀客の耳に迫らず、觀客の目は人形自身の動き、全體の舞臺の雰圍氣には集中せずして、奇麗な肩衣をつけた人間が一人と、黒い頭巾を着た人間が二人とが、一つの人形を差上げて、人間の如く動かしてみせるのを事細かに見物するといふ事になつた。これでは舞臺の緊張などいふものとは大分縁遠くなるのであるが、その盛上りの悪い淨瑠璃と、

浮出しの悪い人形とが、旨く合つてゐるならまだしも、合つて居らぬとなつては愈々致命的で、話はお仕舞になる。そして其合つておらぬ主なる責任は、主として人形の方に在ると思はれる。

人形芝居に舞臺監督が要るとは、東京では既に一再となく云はれて居る。植村家の支配に在つた時代には、文樂軒なり、其未亡人なりが其役を務めた譯であるが、今日では銘々が自分の藝をして喝采を博しやうとする外、殆んど床との關係など誰れも見てやらぬやに思はれる。人形と云ふものが、銘々一つ宛デクを持出して踊らして見せる藝當なら別とし、人形で芝居をするといふのが建前なり、そして所謂人形淨瑠璃だと云ふなら、人形同志の關係は申す迄も無いが、床との關係に十二分の注意を拂はずしては、いくら個々の人形遣が「妙技」をしてみせても、全體として纏まらぬものは「藝」とは申されぬ。昔此太夫は忠九の雪竹の待合せ問題で人形と意見が合はず、仕打に自説を押へられた爲めに竹本座を去つた。今日なら銘々勝手にやつて客を置去りにするであらう。苦々しい事である。

これには、前云ふやうに、太夫の責任もある。ことに未熟な床では人形も骨が折れよう。併し原來が人形が付いて行くべき筈のものである。藝の力で床を引摺るなり樂屋では激論しても、人前へ出す時には何とか鼻の付いたものにして見せて貰ひたい。

其二を少し具體的に云ふと、第一が出遣りである。人物の登場とか退場とか云ふ事は重大問題で、揚け幕の開け方一つでも忽せに出来ぬと思ふ。人形は人間と違ふし、又床より一寸先に出すといふ約束はあるとしても、それは皆舞臺效果の爲とか、節付けと動きとの間の無理とか、根本的には大きな下駄を履いて三人掛りで動かねばならぬ事情とか、此頃では舞臺が廣過ぎて足数が殖えるとか、それぞれ理由のある事であり、其範圍でのみ許さるべき事であつて、勝手氣儘にやらかしてよいといふ理窟は無い筈である。どこかでいつかも書いたと思ふが例へば「御殿」で太夫が「權柄……」と云ひかゝるともう千松が出て居て後ろでうろくし、「其菓子」あたりでもう八汐が突さして居り、仕方が無いから「ぐツと」今一度突さしたり、埒も無い。「佐太村」で白太夫が兄弟夫婦を追返し、生唾を飲み込んで櫻丸のかかれて居る奥の間へ行く、意味深長の所で、太夫と三味線とが「唾をジャン呑み込んでチーン」と大いに氣分を出して居るのに、白太夫はさつさと引揚げて已に久しく舞臺には居らず、床が完全に置いてきほりを食つて一人角力を取つて居る。舞臺行儀もよいのばかりは無く、仕所がすむと人形ぐるみ引込んでしまつたり、さうかと思ふと同じ場面でも後援會の時などには人のしてゐる間に自分の人形で何やらして見せたり、少くはなつたが、無闇に掛聲をしたり、どうかと思ふ場面に足踏みで煩さく賣りに行つた

りする事も無いでは無い。

藝自身の上でも、沼津の松原で津太夫が「危いぞや爺どん」など、遠方向いて云つて居るのに、榮三の重兵衛は刀を取られたのに氣付いて腰のあたりを捜して居ると云つて、津太夫を糞味噌にやつつけて榮三を褒めちぎつた批評なども見た事があるが、舞臺は藝人同志恥の搔かし合ひをする場所とは違ふので、それ程結構なものなら樂屋で一應打合せする事を勧めてこそ然るべきやに思ふがどんなものか。太夫の方では太十で光秀が松の木に登りゆく時のカゲ入りのチャンキチンや、寺子屋で千代が松王にフクレル間の待合せや、昔から随分下らぬ事を付合はされて居るやうに思ふ。寺子屋の「踏込む足も消しとむ内」の文句と人形との違ひは芝居でも同様のやうでどうにも仕様が無いのであらうが、こんなのは別として出来るだけ全體として完成したものを見せるといふを目安にされた。尤も右の榮三の場合は一例に取つた迄で必ずしもそれが非常に不都合だと云ふ程の意味ではなく、解釋も理智的ではある。

出使の事は度々云はれて居り、古靱太夫支配の下に幾分改善されやうから今は云はぬ。之に對する人形側の辯明としては、松竹が舞臺面を賑かにする爲めに出使ひを好むからだと言ふのが、松竹に隸屬して居る現狀としては一應通るが、松竹よりも自分達自身の方が一層之を好むであらう。紋十郎が何時かの放送の時、出遣ひでな

くては「見てられしまへん」と一口に云つて退けたが、それ程譲遜しなくともよからう。「客が顔を見たがるから」と同君が云つたとか云ふ事も最近何かで讀んだが、顔でなくて尻などであつたら、いくら客が見たがつたからとて見せはずまい。前途ある同君へ此機會に「眼で見るとは無、面で見るのである」といふ小金剛巖氏の言葉を贈る。「人形が役者なのである、人形遣では無い」お分りか。

要するに、今少しく床と息の合つたものになくは「人形が人間のやうに動く」だけで段々満足出来なくなると、其藝術的良心の不足が目について、矢張り古典といふだけあつて間が抜けて居る、とならう。幸ひ櫓下に古靱太夫のやうな擬り屋があり、人形の座頭に榮三を持つ今日、此點を何とかしたら文樂の舞臺もぐつと締つて來ると思ふのである。

(一七、二二四)

東海道線 辨天島の一夜

波 多 野 光 雨

春雨に駒下駄ぬれし夕かな

# 因會の改組と其の質的變化

中山泰昌

「日本因協會」は去る一月二十五日、四ツ橋文樂座に於て結成式を挙げた。其の擧式の莊嚴さ、華やかさ、盛大さは、各紙誌に報ぜられたところであつて、今後の目覺ましい活動を期待するに十分である。

そこで私のお尋ねしたいと思ふことは、この因協會は時局の認識を新にして、戦時下の新體制に響應すべく、從來の「因會」を發展的解消して新に成立したものが、それとも時局に便乗して何ものかを掲まん爲に當局の慈憑に従つて便宜上新團體名に改稱したに過ぎないものか其の孰れであるかといふことである。

斯うムキ出して云つて了へば、無論前者だと言下に答へられる人もあらうが、新會長古鞆太夫氏の御挨拶を拜見すると、單に在來の團體たる「因會」が、昨年四月四日大阪府の認可を得て現在の名前に改稱したに過ぎないといふやうである。無論時局の認識に對する會員の發憤と覺悟とに言及はしてゐらるゝが、それは改稱すると否とに拘はらず、又時局がどうであらうがあるまいが「音曲の司」たる義太夫人の昔からの一貫した精神であらね

ばならず、さればこそ、新會長も、二百五十年の昔に溯つて「二十日」「因講」「因會」の因縁と歴史とを語つてゐられるではないか。

所が來賓側の祝辭を拜見すると、大阪府知事や申根協會顧問は「日本因協會の創立」として祝意を寄せられ、大阪市長や土井入形淨瑠璃協會代表は之を「改組」とせられ、白井松竹會長や三室戸大日本淨曲協會長も「新發足」とせられて居り、こゝ聊か混雜を來してゐる。併しそれは協會の新結成に對する所見の相違に過ぎないからそんな事はどうでもよいが、日本因協會として誕生した斯の新團體は、本來の大多數の會員が考へてゐたよりも一歩違つた内容に變化してゐることを注意せねばならぬと思ふのである。

x

それは何であるか。云ふまでもなく新に「人形」が加はつたことである。即ち人形が加はつた事によつて、舊來の「因會」が明確に質的變化を來したといふことである。

併し乍らこの因協會に、新に「人形」が加はつたといふことは、果して會員全體、一人の異議もなく承服し得たところであらうか。この人形が加入したばかりに、急に「三業一體」といふ新語を頂戴させられて了つてゐるが、三業一體は文樂座を職域としてゐる人達の間だけに通ずる文句で、そこに職場を持たぬ會員には頗る縁遠い無意味なことであり、それどころでなく、現に文樂座に籍のある人々の中にさへ、人形を無視し、除外し、從屬視して之を同格に置くを欲しない人さへあるのだから、之に對する不平は蓋し少くあるまい。若し然うでないとし、人形を同格に扱ふ事を當然と考へてゐるなら、義太夫と人形との歴史的關係を顧慮して、今日を待たず疾くの昔に人形を加へてゐた筈である。されば此の問題が此の時局下に起らず、平時何人かが此の「人形加入」の問題を提案したとしたら、恐らく全會員は素直に之を受入れはしないであらう。議論百出、因會二百數十年の傳統さへ擔ぎ出して、之を體よく一蹴したであらうことは想像に難くない。

この人形無視乃至人形從屬視の思想は、當の文樂座の太夫三味線の多くは固より、若きインテリ批評家の間に殆ど通念となつてゐるかに見える。それを最も端的に現はしてゐるのが、今回の日本因協會結成式に於ける新會長の挨拶だと見れば、頗る興味深いものがあるのである

當日の來賓の祝辭を見ると、日本因協會の結成は、新に人形を加へて三業一體の組合になつた事に最も重要な意義あるが如くに口を揃へて「三業一體」を押しつけてゐる。今その文辭を拾つて見ると、

(三邊大阪府知事) 太夫、三味線、人形の三者が打つて一丸となられて、茲に「日本因協會」を創立されまして……

(坂間大阪市長) 人形淨瑠璃は、淨瑠璃と三味線と人形によつて演出せらる、三位一體の渾然たる綜合藝術として、夙に識者の絶讃する所で……

(白井松竹會長) 因會は今度は更に人形の人々をも加へて、愈々三業一體の實を擧げ、改めて日本因協會の新しい發足を見る事になつて……

(中根協會顧問) 今回人形淨瑠璃の構成要素たる太夫三味線、人形の三者一體となり……

(三室戸大日本淨曲會長) 茲に於て太夫、三味線、人形の三者一體となり協會を結びて……

(土井人形淨瑠璃協會代表) 改組に當つて從來入つてゐなかつた人形の諸氏をも加へ……

來賓の祝辭が符を合したやうに、人形の新たな加入を高調せらるゝに拘らず、肝腎の新會長の挨拶中には、一言も之に言及してゐられず、而も過去を顧みては

今日まで此の長い間の傳統を保ち得られ、私共の此の時代まで繼承され、吾曲の司としての權威を落さずに

参りました事は、將に義太夫節の精神を保たれました各太夫、三味線、人形、この三業の先輩師匠方の御座で御座います。今更何と感謝申上げてよろしい事か其の詞も出ませぬ。

と感謝の至情を捧げてゐらるゝのである。この至情を辿ると共に、大阪市長のいはゆる「克く關係當局の指示に基き、今回長い歴史を有する因會の改組を斷行」したのであるからは、従來の因會が其の本質に重大な變化を來した事に特に言及して、新たな體制に於ける因協會の使命を高揚せらるゝ所あつて然るべきではあるまいかと思ふのである。

×

太夫、三味線が人形を從屬視し、興行者が之を興行上のお景物に考へ、單なる商品として取扱つて來た歴史は相當長い、それは彼等の待遇に對する差別、三者の日常生活形式にまでハッキリと浮き出でゐるのだから争ふことは出来ない。例へば文樂の東京興行の筋書本を見ても、それが若手興行と唄はれる場合でも、太夫、三味線は先輩に至るまで大きな活字で掲げ、一方之にお附合の人形は若手ばかりでないに拘はらず、文五郎、榮三の元老株まで、小活字で押こめてある。又地方へ行つて或場合の如き、太夫、三味線は先輩まで旅館で寝かせて、人形の中小輩は芝居の大部屋へ、煎餅蒲團を引つぱり合ひでゴロ寝をさせることもあるといふ始末である。

更に其の生活形式に至つては、人形は他の二者と格段の差がある、それは實際上非常に不利な立場にあるが爲であつて、即ち太夫、三味線は、文樂以外に、歌舞伎にも放送にも出られるし、弟子もとれる、お座敷へ、お邸へと職域は廣くて且つパトロンも自然と出来るが、人形は文樂の舞臺以外には、極く稀な振付の仕事位以外に稼ぐべき場所がない。而も勞動は烈しく、時間は終日に及んで餘裕がないと來てゐるが、一定の給金以外別途の收入は殆どない。之では對等の生活は出来ぬのも當然であるから、何とか考へてやるべきに、誰もがそれには頰冠りである。私がそれ等を考慮して、少しでも其の職域を廣くしたいといふ考へから、人形と義太夫以外の他の淨瑠璃と握手せしめた時、これ等頰冠り批評家は、傳統を破るの、文樂の權威にかゝはるのと詰寄つた。乍併、太夫、三味線は舞臺以外でも保存の道はあるが、人形だけは興行價値を持たしめざる限り保存の道はないのであるから、それが爲の職域擴充位は、寧ろ同情の眼を以て見てやるべきではあるまいか。

之は此處では餘計の論である、只、人形の生活が他の二者と異つて格段の差があり、自然人形自身もいぢけて來、他も之を輕視するといふ傾向があることは事實である。

×

斯うして無視され除外され、從屬視され虐待されて來

た人形を、古格墨守にカチ／＼の御連中が、二百餘年の傳統を破つて、何か故に急に因會に之を加ふるに至つたか、其の意圖、其の目的については、新因協會長は、十二分に世間を理解せしむるやう、説明せらるべきではなかつたらうか。

或は之は、因會に人形を加ふることは、從來の會員全體の殆ど好むところでないのであるが、「當局の指示」があつたので已むを得ず加入せしめた、それで此の點にはワザと觸れずにおかうといふ、一に會内の平和を顧念しての心遣ひであつたかも知れぬが、併し今回の改組が、「人形を加へての三業一體」といふ事に重點を置かれ、其の「人形」を加へたが故に、當路から特別の援助さへあるといふに至つては、會内の不平など、よし有つたとしても吹き飛ばして然るべきであり、そんな舊體制の考へを持つてゐる人々をこそ、其の結成を固くする爲に除外して了つてよいことだと思ふ、（私は會内に事實不平があつたかどうかを知らぬ。只其の傳統をやかましく云ふ藝道の人々の立場から考へて、寧ろ有るべきが當然であり、新會長の挨拶から見ても、善意的に然う考へたいのである。それは賢明なる古靱太夫氏として、此の一大事業を見逃さるべきではないからである）殊に新協會第一の事業として、三月下旬文樂座で二日間公演をやつた、それも人形を遣つたからこそ、興行を安易ならしめたのではないか。私は、新協會第一の事業が、人形を遣つて

華々しき公演をやつた、或はやり得たといふ、此の事實をせめて記憶しておいて頂きたいと思ふ。

×

兎もあれ、舊因會員の好むと好まざるとに拘はらず、それが「當局の指示」であるにせよ、無きにせよ、因協會は「三業一體」の上に新發足の基礎を置いたことは事實であつて、新協會は舊因會と全然素質を異にするものである。この「三業一體」といふ言葉の存立すら排撃せんとする某批評家の如きは、或は、人形が加はつたとて内容、即ち質的には少しも變化は來さない。只「手傳ひ人」が一組殖えたに過ぎぬとせらるゝかも知れぬが、それは時局下の新體制を認識せざる強辯である。

尤も斯う云つて了ふと、私自身が時局病患者で、この患者特有の媚態を露呈してゐるやうで氣恥しい氣もする有體に云へば、この因會が、先人を奉祀する淨瑠璃神社に、先亡人形遣の靈も祀りながら、之を獨占して了ひ、今日まで其の人形遣を遂に其の會に加へなかつたといふことが既に大きな過誤であつて、其の誤謬を誤謬として認識すれば、今日更めて人形が加はつたとて、其の内容的變化はないと云へるかも知れぬ。併し然うだらうといつて「三業一體」の新語（ださうな）を排撃する理由にはならぬと思ふ。

こんな小面倒な議論は止しにして、兎にも角にも、從來の因會に新に「人形」が加はつた事によつて改組が斷

行せられ、そしてそれが日本因協會としての新發足の土臺となり、且つ「人形」あるが故に或る特殊の支援まで享くるを得るに至つたといふのであるから、因會として今回の改組は單なる内容強化ではなく、其の永き傳統をも破つたといふ、根本的素質の變化に基く一大飛躍をしたものと云はねばならぬ。

× されば誰が何と云はうと、因協會に於ける「人形」の地位は最早確定的である。そこで因協會員全般に對し切望に堪へざることは、從來の人形從屬視の態度なり考へ方なりを一變して貰ひたい事であり、同時に世間一般に對し又興行者側に對しても、其の態度を改めしむるやう努めて貰ひたいことである。之は文樂人に對してのみ注文してもよいことであり、又文樂の紋下たる古鞞太夫氏にのみ注文をつけるだけでもよいやうではあるが、當局の指示に基いて生れた斯の強力團體たる因會に之を望んだ方が、ヨリ有効であることを思ふのである。

實際、今日迄のやうに「人形」を輕視し無視し從屬視したのでは、決して完成された「文樂美」といふものは發揮されよう筈がなく、又淨瑠璃をそれ自身の古典的價值も高くは評價し得られないであらう。事實、文樂の太夫三味線は、殆ど人形との協調をそつちのけに、勝手に自分だけを語り、弾いてゐた。人形の方では仕方なくそれに従いて間を合はせて行くより外に手はないから、彼等

は其の太夫を「氣まゝ太夫」と綽名して、本氣では人形を遣はず、投げやりにやつてゐた。こゝには最早や舞臺上の諧調といふものはない。たゞバラ／＼の、氣の抜けた、油の乗らぬ人形の動きが、客の眼にちらつくだけで而もそれが太夫、三味線に邪魔さへなつてゐるのである而して此の不調和、非諧調の罪を、太夫も三味線も批評家も、一に「人形」にのみ被せてゐた。主客顛倒も甚しい（といつて、私は、人形の方は總てが完全だと云はぬ人形の方にもノホン千萬那のがあり、只遣へる、動かせるといふだけで、何時になつたら水平線以上に首を出せるのかと見てゐるだけでハラ／＼し、腹の立つのがあるのも事實であるが、太夫、三味線は何故自らを「主」とし、人形を「從」と考へながら、其の人形を十分に教育して來なかつたか。督勵しなかつたか。何故、むしろアベコベに之を閑却して非妥協的にさへ出て來たのであるか。）

× 今や、日本因協會の誕生によつて、人形は其の最重の要素となつた、「三業一體」は其の鐵則となつた。而してそれは、因會にとつて決して不面目でも不利益でもない。寧ろ之によつて本來の面目に反り、將來性を増大したのである。どうか新會長に於ても、會内の不平不満などに左顧右眈することなく、人形の平等待遇に勇と斷とを以て當り、「三業一體」の實を擧げて、以て「當局指

示の重責に力を效されんことを切望する次第である。附言、日本因協會の誕生の意義、其の使命にはもつと大きなものがあらう。古典の阿諛的な説等に對しても此の因協會の結束によつて斷乎たる態度を以て臨むことが出來よう。廢曲の復興、新作の獎勵、そんな事も



## 合 邦 雜 感

西 尾 福 三 郎

是からの大きな事業であらう。淨瑠璃の宣傳、普及も其の重大な任務の一つであらう。それ等については新會長の抱負が十分にあるであらうと思ふから、茲には云はぬこととする。(完)

二月は古靱極めつきの堀川をピカ一に、他に何があつたやら今鳥度宙では思ひ出せない位記憶が稀薄である。生憎私は病氣で折角の堀川初め他のどれもこれも親しく耳にする機會を失してしまつた。三月はこれ又古靱の合邦以外に取上げるものがない。この頃はとかく出し物の數の多い事ばかり見せてそれで客を呼ぼうとするやうな傾向があるが、かうなると見物心理と云ふものは妙なもので、多くの中からこれと思ふ目星しいもの一つか二つを目あてに足を運ぶ氣になり易い。數さへ多ければ

何でなりと當り分があるやうに思ふのは行列買ひの山の神だけで、玄人の見物はそんな甘い手に乗るものではない。で今月の目標は矢張り古靱の合邦一つだけと云ふ事になる。ところで變に言ひ譯めくが今月も筆者多忙で漸やく身邊を整理して文樂へ顔を出したのが千秋樂の二三日前で、しかも時間を取違へた爲に私の行つた時にはもう古靱の持場が大分語り進んで納戸へこそはあたりでもあつたらうか、遺の古靱も樂日近くで相當聲が痛んでゐるし、それに肝腎の前半をき、外しては何うにも仕様が

ないので、今月もまた書く事を遠慮させて貰ふつもりで後半をきゝ終るとそのまゝ外へ出てしまつた。文樂の出し物の並べ方が古靱一人の重點主義になつてくると、勢ひきく方も重點主義にならざるを得ない次第である。ところが外へ出てつくづく思つた事であるが、ずい分評判の古靱はんの合邦であるが、私のやうに牛蒡をぬいたやうにこの後半だけをきいた後で考へてみると何等印象に残るものがない。これはやはり大序から打出しまで退屈を我慢し乍らでも文樂と云ふ特殊な雰圍氣に浸りきつて居ない事には、眞に古靱の淨瑠璃の醍醐味が分らないのかも知れない。その意味で枯木も山の何とやら、せいぜい盛り澤山に並べ立てゝ耳と眼のトレーニングをしておいてからその最高汐に眞打の藝を見せてやらうと云ふ座方の企劃はこれ又一理も二理もある譯か。とそんなことを考へ乍ら、恰度同じやうな時間に少し隔れた歌舞伎座で吉右衛門梅玉等で合邦が出てゐるのでこれをみるべくバスに飛乗つた。

着いてみると恰度東京方の床の東太夫が前半を受持つて芦の浦々あたりをやつてゐるところであつた。(因に後半は關西方の岸太夫の受持である)遺がに人形と違つて歌舞伎の方は萬事スペクトルに整理されてゐて觀た目が頗る賑やかである。殊に衣装の配色がとても氣がきいてゐて、眼本位のお客にはこれに限る。文樂のやうに澁いゆき方では所詮大衆の心は捉めない。あれはあく迄耳

本位なやり方で眼で見ると人形芝居としては損であると云ふ事がまさゝと分る。人形劇と歌舞伎劇の二つの行き方がはつきりと分つて、この頃の文樂と歌舞伎の狂言の並べ方にいつもかうした同一の物を並べてゐる事は我ら研究書生にとつてまことに好都合な次第である。先月は長三郎の吃又に對して確か文樂でも誰かゝやつてゐた筈だし、一月は古靱の陣屋に對し延若がこれを演し物にしてゐた。當事者に心あつてか無くてか、とにかくかうした研究比較に便益するやり方はいつ迄も續けてやつてほしいものである。

さて梅玉の玉手は人形と違つて頗る突込んでやつてゐる。この人としてはむしろ異例な位お辻の戀が濃厚に出てゐる事に一寸眼を瞪らされた。こゝで積極的に演出しておく後半のモドリがウンと効く譯で歌舞伎の行き方としてはこれが常道なのかも知れない。吉右衛門の合邦も今では當代で屈指の作品と云はれてゐるが、多少ギツクリシヤツクリし過ぎる厭ひはあるが、充分に義太夫腹のある人だけに安心して見てゐられる。殊に、これが坊主のあらう事かい、の次ぎにくるこれがのくり返しの一キが素的によい。氣になつたのは、云へど合邦嘲笑ひ……でちつとも嘲笑ひの腹が出てなかつた點、これは遺がに古靱と榮三の合邦には嘲笑ひの腹が瞭然出てゐた。それから古靱が無間地獄をハツキリとムケン地獄と澄んで語つたに對し、吉はムゲンと濁つて云つた事である。

文樂の床本を見ると無限地獄と印刷されてゐるが、これはよく誰でも平氣で使ふ誤字であるが無限地獄なんて云ふ地獄はありはしない。無間が正當である。従つてムゲンと澄んで發言すべきであることを附言しておく。

歌舞伎では未段になつて坪井平馬が出てきて合邦に斬かゝり、あべこべに入平に斬られて死ぬ所がある。しかも玉手を庇まつた罪を平馬が數へ立てるところや、又蚤一匹殺さぬ合邦が、入平が平馬を殺すのに平氣でゐるところなど、可なり苦々しい細工がしてある點が目立ち、又玉手が落入りに「蓮の夢に月を見るかな」とか何とか云ふ辭世の歌を詠むのも永い痛手の後であるから不自然極まる話である。以上等々に亙つて種々の相違點が眼について仲々興味が深い。

最後に合邦一段を讀んでみると、主人公の合邦と女主人公の玉手との重さはさる事乍ら、人形で見ても歌舞伎で見て、女親の存在が割合に輕く扱はれてゐる辭に文章の上ではこの母親が相當重く扱はれてゐる事實に注目される。人形では單に合邦女房とあるだけで名前すら與へられてゐない。歌舞伎座ではおとくとなつてゐるがこれも間に合せらしい名前で、役者は團之助あたりだからその重味の程度も知れやう。が、つらく考へてみると、これは野崎村の盲目の老婆にも比すべき重要な存在でなければならぬ事に氣がつくであらう。

その譯は先づ冒頭にあるひわれに洩るゝ細き聲でかゝ

様と最初に玉手から呼びかけられるのがこの人である。以下夫の合邦には色々科白があるが、この女房はいつも夫の陰身に添つてゐるので人目には立たぬが、悲しき母親としての在り方は仲々に重い。幽靈に茶漬の條りもこの母ありてこそ。又かゝれとしてしも黒髪の有名人條りもこれは母親の嘆きであり、納戸へこそは入月の見世場も母親が働き、オゝ術なかる苦しがるの困難な語り場も同様。末段犬猫にさへ隠したに……もこの母親の愚痴である。

要するにこの一段に於て重要な存在であり乍ら、それが捨石の如き見えざる力となつて底に沈んでゐるこの母親を再吟味する必要があらう。勿論心ある太夫は充分これを心得て語つてゐるであらうが、歌舞伎では前述のやうに頗る安値に取扱つてゐる點に改めて氣附かしめられた事を附記しておきたい。

絹地・色紙・短冊

下谷區仲御徒町一ノ一七

波間商店

電話三七〇五番

# 文樂人形小道具帖 (七)

宮尾しげを

良辨杉

堤

牀几 一  
毛氈 一  
辨當箱 一荷

花簪付藁づゝ荷一式 一  
吹玉屋首提箱 一

ふき玉 澤山 一

櫻持杖(わら草履付) 一

東大寺

竹杖 一

矢立 一

紙付 一

二月堂 一

挾箱 二

立傘 大鳥毛

書付

わく牀几

袋付杖

輿

こしさけ守

一寸八分阿彌陀佛

ふくさ包

國性爺合戦

樓門

旗

鐵砲

地圖

柄付鏡 (仕掛)

竹杖

珊瑚樹杖

縛り繩

柄長唐團扇

獅子ヶ城

赤塗唐ひつ棒付

きぬがさ

赤塗煙草盆

大煙管

赤塗刀立

劍 紅鉢 (仕掛)

懷劍

簀 (日本品)

かさ (同)

がんど (同)

棒茶ぬり

きぬがさ

赤ぬり椅子

唐團扇 (毛付)

牡丹花 赤

同 白

れんじし 蝶々

安宅關

をいびつ

金剛杖

笠

卷物

白臺

砂金袋入

一卷

三寶

大盃

瓢箪

かつら桶

八百屋お七

卷狀

ぶら提灯

行燈  
みの  
ばちようがさ  
しもく

玉三

銀燭 四本  
琴 一式  
双六盤 一式  
双六道具  
袋入薙刀  
女切首  
しきび花  
白布大巾 四本  
六尺

關取千兩幟

米俵  
俵かさり  
煙草盆  
丸盆  
茶碗  
鏡臺  
鏡  
櫛  
角力番付  
みき徳利

澤山五

酒屋

三寶  
樹花  
花立

酒入桶  
ひしやく  
じようて  
一の樽  
樹  
さし錢  
張紙(銘酒相生)  
丸行燈  
卷狀

阿古屋

岩永火鉢  
袂書  
切桶  
ひしやく  
横づち  
梯子  
三味線  
胡弓  
琴

七福神實の入船

釣竿  
胡弓  
三味線  
琵琶  
鯛  
大黒紐  
かづき  
獅子  
式三番叟  
面箱  
三寶  
鈴  
扇  
中啓

初音旅路

女持笠  
女持杖  
つまをり  
鏝  
鼓  
扇子

白石噺

雷門  
床几

丸盆  
茶碗  
金包  
財布

煙草盆  
管笠  
杖  
證文  
しやく杖  
矢立  
揚屋  
鏡臺  
煙草盆  
本  
卷物(守)

伊勢音頭

卷狀  
硯箱  
煙草盆  
刀掛  
團扇  
銚子  
盃  
肴  
のみ臺  
手洗鉢  
守り包  
提灯  
手燭

澤山

澤山



# 人形頭取玉次郎の死

齋 藤 拳 三

文樂座の人形遣頭取吉田玉次郎が三月十三日に死去した。

人形の頭取と云つても、今の文樂座の人形の舞臺の責任を負ふ人ではなく、小割と云つて三人使ひの人形の左遣ひや足遣ひを定めたり、亦出遣ひをした場合の袴の代として座から出る何がしかの手當金を分配したりする事務員の様な役をする位だったのである。

然しもし頭取と云ふ役を持つてゐなかつたら新聞紙でさへも其の死を報じなかつたであらうし、亦、其の記事を見た人でも、之れに對して何らかの感慨ある人が一體何人あるであらう、其れ程彼は社會から埋れた寂しい存在だったのである。

人形芝居が餘命何幾もなしと云はれて一部の少數の愛好家から、國家的存在として尊敬されて居る榮三や、文五郎に比して、あまりにも寂しい存在であつた人である人形芝居が現在の如く年二回も上京全員引越興行とし

て東京に意外の人氣を拍す様になつてからの彼はもう足が悪くなつて左手こそ美事だつたがもう酒屋の宗岸が沼津の平作の様な老爺役かせいぜい陣屋の彌陀六程度役ぎり見られなかつたのである。結局私等時代の東京人では玉次郎の荒物使ひとしての藝を語る資格はないのである。此の四五年はもう番付にこそ二三の役が書いてあるが實際は舞臺へは出ない文樂座の番附獨特の不思議な存在だつたのである。然し私は彼が攝津大掾のすしやに權太を遣つたと云ふ過去だけで彼はやつぱり動けなくつても文樂の番付に其の名を留めて置きたかつたのである。今の文樂の三人遣ひ人形が傳統を貴ばない様になつてはもう終りである。

榮三、政龜、小兵吉等の老手が淨瑠璃の文句以外の無駄な動きをしないでだけでも、私には貴しとしなければならぬ程今の人形芝居は末流的なのである。

一例が最近、昨年暮の政龜の合邦の動きなどを見ると

最初に玉手御前が門口へ来た時に「合邦どん、何とぞ云ふてか」の件などを見ると、政龜の演出では佛前に向つて後向きに鐘をたゝいて居る老婆が後向きのまゝ顔だけ一寸ふりかへつて見るのである、これがなかくいゝ演技であつて、政龜といふ人は動き方の堅い無器用な人であるが何としても、その演出に信用の置ける點が實に面白い氣がする。

その點玉次郎の如きもの識りの古老はその演出を一つ一つ若手に残しておいて望しいと思ふのも私一人ではないであらう。

現今の文樂の人形芝居は私のやうなつぶな素人が見てもさへも演出が曖昧不統一で舞臺監督、或は演出者を置く事が焦眉の念と思はれる時、此の人などを其の適材とすることが最上近道と思つた事も再々ではなかつたからである。

然しこれは一度も玉次郎に會つた事の無い愚かな私人の空想で、當人と會見でもして、人形芝居に何等の情熱も希望も持つてゐない人でもあつたら、すぐに幻滅を感じてしまふかも知れない。

その點玉次郎に會はなかつた事が當人の死に會つて、此の拙文を書かせたのかも知れないとも思ふのである。

私は、此の人には一度會つて見たい様な氣がして居た腰が動けないだけで、あつたら健康な身體を持つてゐる人形遣に、現在の人形芝居に對する感想とでもいつた事

を聞くのに愚しい興味を持つてゐたのであつた。彼の死後文樂座には新に頭取が出来てあらうが現在の制度では誰が出て同じである。文樂の人形は簡々の演技を樂むより外に道はないのである。

## 社 告

東京第一陸軍病院

太棹第百卅四號

東京第三陸軍病院

同 三 十 冊

太 棹 社 寄 贈

右傷病將士慰安として寄贈仕り候 第一陸軍病院には五十名、第三陸軍病院には三十名の淨曲愛好家有之毎月の「太棹」を樂しみに待ち居られ候何卒皆様より御寄贈御申込み賜り候はゞ幸甚の至りに存候

太 棹 社

# 鸚鵡會と猿春會

内田三三

## 鸚鵡會

第二回鸚鵡會を  
聴く。柄に無さそ  
うで案外良い土佐  
廣の「引窓」が愉  
しめた。

初回公演の時の  
「船屋」は權太に  
迫力と腹が薄く、  
稍失敗感を抱かせ  
たが、今度の「引  
窓」は濡髪が多少

無理な外、與兵衛、お早、母親の順に住  
く、全體に風物詩的な哀愁が滾流する。

「人の出世は……」をサラリと出で、  
「時知らず……」と派手にしめて行く技  
風は、綱造流の「時知らず……」を味に  
籠らせ、「見出しに預り……」でパット  
變つて出る鮮鋭な演出と比較して心理的  
な重厚さこそないが練妙だ。

「イザ御案内」「お先へ」もオコつかず  
滋味を持たせて流暢に運ぶ。名も「十次  
兵衛と……」の件りは、羽左を想はせる  
爽やかな甘美さで演る。「母と嫁とは……」

……もしつとり巧者に持つて行く。

三原傳藏、平岡丹平の物語りは一通り  
だが、お早の云ふ「申し與兵衛さん……」  
は色氣と情があつていい。短い語韻の採  
に新町で都と云ふたお早の前身を髣髴さ  
せる。

「ハテ折るも一つは……」で、ホロリ  
とさせるのは情が屈いた演出だ。

「目早き與兵衛が……」は眞銳にモリ  
上る迫力はないが巧緻に練描する。だが  
老母が胸迫つて云ふ「與兵衛！」はモウ  
「息深韻がありがたい。それと「母者人……」  
から「二十年以前」へかかる足取り  
は餘韻が濃出せず、心理推移が鮮かに浮  
ばなかつた。見えざる「心の世界」を感  
動的に渾描するのは至難であらうけれど  
淨瑠璃の眞隨はかかつて二つ云ふ處を深  
彫にする密度と雰圍氣にもある。

「丸腰なれば……」の件りは、一番感  
心させられた。殊更誇張した町人根性を  
露出せず。「ふんはり」と情を含くませ  
て、やわらかく運ぶ。

「商人の代物……」の次に、ハイと入  
れずに「お望みならば上げませう」とす  
つきりと描出するのは含蓄があつて優れ  
てゐる。この靜品のある演出は見事「大

## 消息

## 會報

天津にて

河野國聲

二月中旬から天津に来てゐます。  
北支の自動車業界の統制機構實施の  
爲め特に努力中で思はず長く滞在し  
てゐます。何も國の爲めだと思つて  
の事です四月には歸京します。

三好會

森 三好

三月廿八日午後六時より第十回を  
相互俱樂部に開催、鳴門（喜三香）  
寺子屋（津満子）蝶八（美昇）靈坂  
（三好彈語）同後（梅聲）絃（三好）  
當夜は隣組長出演と聞き組合員全部  
來聴、頗る賑々しく、なほ十一回は  
五月二日駒形俱樂部に開催する事に  
決定、語り物は、柳（ます三）十種

小演出し」の前文を藝術的に生かしてゐる。

濡髪は不味くはないが、この人の非力が禍して悲壯な雄愨に乏しい。

綱助の絃は鋭いセンスを持つてゐて急所々々をカツキリと弾く、藝神經の俊敏さが緊密だが、どこかおほらかな屈伸性が欲しい。

染登の「質店」は堅實な語り口で破綻はないが望蜀には深美なものを加味させ度い。且つて聴いた「小津賀」の質店は久松が秀作で陰影のある憂愨が心を衝いた。

染登は小津賀と反對にお染が佳い、ネバつかず大家の娘の品位と「情愨」が香高く表現される。特にクドキの「此腹帯の」邊りに美しい情愨を漂はす、只惜しいことにこの人特有の「引き締つた潤ひ」が當夜は意外に淡かつた。

猿幸の絃は華麗な裸に心韻が籠つてゐて悪くない。

小仙の「鮎屋」は「極め付」故贅言を省く。しかし何故か私は前回の「合邦」の方が心を曳かれた。この一段は餘りにも手に入り過ぎて、淨瑠璃の本陣よりも小仙のパンナリタイの方が前面に色濃

く押出された感をどこか與へられた。

## 猿 春 會

猿春は一にも二にも、そして三にも努力主義の藝術家である。従つて其の演出も巧拙に關らず「懸命の舞臺」を展開させる。唇を噛みしめて凜然淨瑠璃と四つに取組む精神力の強銳さは若手女義中群を抜く。

而し淨瑠璃は「鬪争」では無い。一心不乱に藝に打ち込むことは好い。だが技倆と腹に依つて、ユトリと滋味を創り出すことを敢へて苦言する。

猿春の「逆櫓」は前半間口の廣さを持ち乍ら、遂に巧味が伴はぬ。教へられた手法を眞摯に辿る必死さは分るが、強力な未完成に終始した。取り分けお筆に情が移らず、正しい演出を踏みつつも潤ひと旨味が滲じまなかつた。しめつけらるやうな「せつなき」「面目なき」が、ジツクリと語れてゐない。

「お筆が胸に……」の痛愨「そうお悦びなされては……」に漲らす、やり場のない寂しささう云ふものが滲透して來ない。

香(喜三香) 太十前(津満子) 同奥(時昇) 本下(巴好) 野崎(三好彈語、ツレ綾清、津満子)

## 安東素義文樂會

安東 金桶陣 鳳

慶祝建國十週年に當り、堅固を誇りし英東亞侵略の牙城星港も無條件降伏の輝しき戦果は勿論みいつの基勇猛果斷な我將士滅私の武勳に依るもの、吾等銃後國民の感謝と合せて祝賀の意を表し、安東素義文樂會は三月一日滿鐵厚生會館階上に於て左記番組の下に感謝の血演を致しました。

宮城遙拜。默禱。先代前(晴昇) 同奥(一聲) 沼津(暉鳳) 忠四(美昇) 同五段目(新笑) 七段目(總掛合) 絃(雛助)

▼綾秀會 二月例會を十日廿三日

菊川俱樂部に開催。十日 三代記、(翠瓢) 山名屋(綾登) 太十(司光) 中將姫(龍司) 蝶八(壽瓢) 絃(綾秀) 廿三日 十種香(翠瓢) 辨慶、

權四郎も熱演さが精のめり氣味でカラツとした面白さが湧いて來ぬ。しかし前半單調な熱演で、進行するこの人の「逆構」も後半は松右衛門が出て來ると俄然生色が蘇り、ガツシリと眞領を發揮して前半とは別人の如き發洩たる演出で大いに良い。特にお筆を納得させる「コリヤ〜女」が巧い。かぶせてどつしり「心の色」を滲じませる演出が秀拔である。それと權四郎が「何故致すまい……」を如何にも奇異の感で云ひ「サア夫はとは……」を怒氣を含くんで強出し「エエ水臭い……」で恨情迫つて涙聲する、三つの段階が、變化と滋味を兩有して良き雰圍氣を漲らせた。

た。火の玉のやうな快演で凍々たる敢闘は強靱な弾力性を貫流させた。  
敢然大物に肉迫する猿春の眞摯な精神力が、豊かな技巧の裏付と心韻を掴んで淨瑠璃音楽として大成する日を筆者は期待する。  
三生の紋は、達技從横寸分のユルミを見せず雄健に力演した。  
坂東勝治の淨瑠璃ぶり二つ「先代」と「酒屋」では、前の政岡が實に申村歌扇に良く似てゐる、殊に肩で達者に芝居する「演伎の寸法」が不思議な位共通性を持つてゐて微笑させられた。  
床の三勝は、ふり込むやうにうんねり流して語る情緒味が、佳照の藝を追想させ、紋の津賀昇は地味だが素直な弾き方で、クセの無さが好感持たれた。

## 悼 双 鹿

招げごも來らぬ鹿や冴返る 正 雪  
語らふてひねもす杵の響きかな 柏 葉  
雪に鳴る厨の高窓の障子の紙 花 臥 衣  
亡き兄は薄着でありし餘寒かな 芳 泉  
あるじなき釣糸寒う巻かれけり 芳 河 士  
鹿語双鹿三途の川に糸垂れん 同

(紀風) 太十前(治光) 同奥(司光)  
合邦(龍司) 先代(壽瓢) 絃綾秀  
▼淨聲會 四月十一日第廿八回を文化俱樂部に開催。寺子屋(二三樂蝶子) 壺坂(林昇、若好) 引窓(乃菊、佳照) 野崎(紫蝶、仙玉) 先代(山生、鹿重) 堀川(義昇、素昇)  
▼寶藏寺天昇氏 九州地方を旅行中本月四日歸京、久々にて並木俱樂部に於ける素義有志主催の身振劇入義太夫大會の初日に出演。  
▼二代綾之助襲名披露 竹本佳照師の二代目竹本綾之助襲名披露は五月二十六日明治座に於て開催、詳報は次號に。

▼南北座 春季公演を六月五日より五日間丸の内有樂座にて開催。  
▼坂東勝治一座 坂東勝治一座は竹澤龍造一座と合同四月十九日越後佐渡に渡り、それより引返して越後路を巡業した上五月六日より富山へ

(以下卅頁に續く)

# 太棹社彙報

本欄は大會又は新生の會を報道致します。開催前月に詳報したるものは開催後の記事を略します。特種の催はしの外前書きを略します。番組御送付なきものは御通信なき會は記載洩れとなります。御諒承を乞ふ。

(太 棹 社)

## 日本精神作興淨瑠璃

### 百選會(第一回公演)

曩きに幹部の改選を行ひ會長に齋藤金太郎(山生)氏を推し、その基礎を堅にした東都聲義會は理事長に井上和風、副理事長山田壽瓢、會計本城冠三、幹事、堀ときわ、黒川叶神馬里芳氏等が各其任に就く事になつたが、會長に就任した齋藤山生氏は日本精神をよく描寫する處の義太夫を大衆に鼓吹するにはどうしても人形をつけて先づ義太夫智識を與へねばならぬ、上演する處の題材も選定し單にお道楽といふ觀念をはなれて日本精神作興に努力してこそ皇軍に對する萬分の一の謝恩である、と大に意義ある會の組織たらしむべく目下乙女文樂式の人形並びに人形遣

ひの養成に盡瘁中であるが、これに先立ち坂東勝治、竹澤龍造合同一座を聘し、その名も「日本精神作興淨瑠璃百選會」と銘打つて四月六、七の兩日正午より並木俱樂部に於て華々しく第一回の公演が催はされた。會の趣旨を左に

#### 「日本精神」

#### 作興淨瑠璃百選會

主旨

未曾有たる大東亞戰爭開始以來、僅かに百餘日に過ぎませんが、我が皇軍の大戦果は實にその當る所を知らず、文字通り破竹の勢ひを以て進み今や遂に二千餘キロの覇權を掌握す

るに至り、自他共に全く豫期せざるこの大戦捷も、全世界の驚異の的となつた事は又當然の事と存じます。此の無比なる戦捷は其の基因何處に在りとせば、今更申上る迄もなく窮りなき 皇恩の稜威下にある皇軍將士が、血の涙を以てしても語り盡せぬ大きな犠牲をもつて『盡忠報國』たる一途に邁進せる日本精神の顯れであつた事は論ずる迄も無い所であります。此の『日本精神』は數千年來銀へにくた上 我國獨特の魂で到底世界如何なる國も之を測り知る事は難しい事でありますが、愈々大東亞建設の時に當りまして、我が一億同胞は基より是れから開拓する各地に於ても、益々之を宣揚して知らしむるの要は急務であらねばならない事と深く信する次第であります。其處で本會は此の『日本精神』を宣

く描寫して且又娛樂として、知らず識らずに腦裡に感ぜしむる淨瑠璃義太夫を以て、一般大衆に鼓吹せしめん爲め各自其の精神を發露して、有益なる題材を選定し之れをお道樂と云ふ觀念でなく、日本精神作興に努力して、皇軍の萬分の一の御恩にも報ひんと今回百選會を計畫致しまして一生懸命勤めます事となりました。

何卒右微意を諒とせられ御協力御賛同の程御願申上度い次第であります。追而、今後益々御賛同賜り題材を御選定して此の主旨の基に御演技賜はらん事を御願ひ申上度う存じます。

昭和十七年三月

主催 東都聲義會

會長 齊藤金太郎

なほ二日間の番組左の通り。

(初日) 沼津前後(山生、猿藏) 鳴門前(紅陽、染登) 後(ときわ、素女若) 本局前(山生、猿藏) 後(壽

瓢、綾秀) 太十前(治光、綾秀) 後(司光、綾秀) 本下前(富彌、猿藏) 後(大嘉津、猿藏) 合邦前(乃菊、佳照) 後(義昇、龜造) 二日目 先代前後(山生、猿藏) 寺子屋前、(叶、扇之助) 後(里芳、勝助) 白

## 女天會春季大會

女天會第四十七回春季大會は三月廿三日午前十一時より並木俱樂部にて開催。會員の諸夫人力演の外會長黒川叶氏の新舞踊「花井お梅」が喝采を博し、博多の清流氏の飛入出演などあり頗る盛況を極めた。

太十(光秀、登盛、十次郎、叶。

初菊、扇華。みさを、里芳。さつき喜香。久吉、歌子。絃、龜造) 璧(叶、龜造) 辨慶(一光、扇之助) 佐太村(喜香、猿喜知) 紙屋(歌子勝助) 寺子屋(登盛、新造) 鮎屋(佳津子、佳照) 玉三(茂玉、扇之

石前(里松、良造) 後(和風、染登) 太十前(一昇、佳照) 後(富彌、猿藏) 陣屋前(錦松、龜造) 後(喜香、猿喜知) 鮎屋前(桔梗、龜造) 後、(吳光、新造)

助) 宿屋(榮子、仙十郎) 本下(喜らく、勝助) 毛谷村(里松、良造) 辨慶(喜代美、猿三郎) 先代(圓六、土佐廣) 太十(扇華、扇之助) 花井お梅(西川師、叶) 安達(里芳、勝助) 合邦(叶昇、新造) 先代(以與子、良造) 梅由(平之助) 質店(おそめ、猿昇) 太十(小六、松四郎) 十種香(喜代子、三福) 赤垣(歸世花、團市) 野崎(久作、登盛。お光、叶昇。お染、津ほ美。久松、以與子。母、下女、喜らく。絃、仙十郎、ツレ、龜造)

# 因會男子部 春大會

日本義太夫因會男子部にては四月十日午後一時より雷門並木俱樂部に於て左の番組に依り春季大會を開催した。

(第一部) 壽式三番叟 (翁、巴太夫 千歳、朝見太夫。三番叟、駒登太夫 卯太夫) 絃 (芳太郎、扇之助、美之助、猿喜知、松市郎、絃内、宗之助 和孝) 白石 (杣太夫、松市郎) 先代 (朝見太夫、芳太郎) 忠六 (卯太夫 和孝) 鰻谷 (彌國太夫 絃平) 妙心寺 (歳太夫、美之助) 十種香 (浪花太夫、猿平) ； 第二部： 鳥羽離宮 (津彌太夫、扇之助) 美濃屋 (巴太

# 義太夫古曲發表會

義太夫古曲發表會は四月六日横濱長友俱樂部で開催して、此地方の愛好家の好評を得たが、例年の通り春季大會として来る五月二日午後五時半より並木俱樂部に於て左記番組を

夫、猿喜知) 岡崎(駒登太夫、猿藏) 酒屋(都太夫、新造) 鳴戸(稻太夫 蟻鳳) 太十(近衛太夫、松四郎) 野崎村(お光、彌國太夫。お染、浪花太夫。およし、歳太夫。久作、杣太夫。久松、津彌太夫。母、都太夫) ツレ(朝見太夫、卯太夫、駒登太夫 巴太夫、稻太夫、近衛太夫) 絃(猿之助) ツレ(猿平、蟻鳳、新造、絃平) 三下り(猿藏、和孝、美之助、絃内、芳太郎、猿喜知、松四郎) 胡弓(猿三郎、扇之助、宗之助) 二絃 琴(松市郎、絃吾)

以て公演に決したが、今回は結城孫三郎贊助出演に依り、大切千本櫻道行には操り人形を加へて觀聽に供する事になつた。

伊賀越太廣間(大内記、朝見太夫

政右衛門、巴太夫。林左衛門、駒登太夫。五左衛門、卯太夫。絃、絃内) 壺坂澤市内(巴太夫、猿喜知) 壺坂寺(卯太夫、美之助) 小品淨瑠璃五月の調べ(巴太夫、芳太郎、ツレ、扇之助) 鮎屋前(朝見太夫、松市郎) 同切(駒登太夫、和孝) 大切道行初音の鼓(靜、巴太夫、ツレ、駒登太夫。絃、芳太郎、ツレ、猿喜知、美之助、松市郎) (忠信、卯太夫、ツレ、朝見太夫。絃、扇之助、ツレ、絃内、和孝) 人形(忠信、孫三郎、靜、孫太郎)

# 素八會

十四歳の時郷里岡山より上京し竹本素女師の門に入り、斯道に専念練磨する事十數年、昭和七年飛行館で初看板をあげた竹本素八は今回師匠の許しを得て去る三月十六日午後五時より飛行館にて「素八會」を催したが、嘗て四國地方に於ける素義界の巨頭小橋ふくべ氏より遺品として

贈られし三代目越後太夫の所持品たりし見臺を當日初めて使用し、多年の努力に實の結んだこの華々しい催ほしに感激すると共に、故人小橋氏並に名人越路太夫を偲んだといふ事

## 豐澤廣助連團體優賞受頒披露

# 乙女文樂 人形入 淨瑠璃大會

大日本淨曲競演會に於て第十回より團體優賞の榮譽を連續した豐澤廣助連はその祝賀披露として三月廿六日午前十時より京都市北野會館に於て乙女文樂人形入淨瑠璃大會を催ほした。

玉三(はじめ) 赤垣(金花) 新口(千司) 忠四(得谷) 岡崎(登鶴) 忠九(津の子) 以上素語り、絃(廣助) 以下人形入。鳴門(お弓、房千代。おつる、靜波。絃、廣助) 紙屋(忠兵衛、光友。おさん、華遊。小春小昇。三五郎、大和。五左衛門、榮糸。絃、時造) 本下(若狹之助、一

である。

荊棘(素女) 新口(素次、素一) 合邦(東朝、仙玉) 酒屋(素昇、猿玉) 太十(佳照、清一) 紙屋(小津賀、紋教) 先代(素八、小播磨)

蝶。三千歳姫、ナギン。伴左衛門、あしべ。下郎、金鳳。本藏、大彌。絃 廣助、琴、吉藏) 鮎屋(權太、出雲。惟盛、眞砂。お里、金聲。彌左衛門、錦昇。母、秀蝶。内侍、タツミ。梶原、喜幸。絃、庄次郎) 挨拶(豐澤廣助連、小花住改杉浦花住) 大文字屋(素語、花住、廣助) 彌作(彌作、生樂。和助、小若。おかや、利生。七太夫、信濃。絃、稻丸、胡弓、吉藏) 太十(光秀、万貞。十次郎、濱戸。初菊、眞砂。さつき、錦昇。久吉、喜幸。操、秀蝶。絃、辰造) 堀川(與次郎、柳平。おつる、

金聲。お俊、重司。傳兵衛、鶴聲。母、檜。絃、廣助、ツレ、團作) 車引(松王、十り壽。梅王、金鳳。櫻丸 花住。杉王、秀蝶。時平、菊二絃、廣助)

## 義太夫翼會

三月廿七日午前十一時半より並木俱樂部に於て開催。

五條橋(猿一、猿吾) 辨慶(山門猿藏) 宿屋(白猿、猿藏、琴、松四郎) 堀川(三山、猿藏、ツレ、美之助) 本下(大嘉津、猿藏、琴、松四郎)

## 九阜會

豐澤鶴助師主催の九阜會第六回は四月八日午前九時半より上野松坂屋ホールに於て開催。

中將姫(檜、鶴助) 寺子屋(吉樂鶴助) 先代(靜、重吉) 毛谷村(昇絃平) 赤垣(小靜、重吉) 帶屋(松玉、絃平) 陣屋(千晴、團市)

# 戰捷祝賀 出征家族慰問 素人淨瑠璃會

## 中老會

八幡市古賀大彌氏主催戰捷祝賀出征家族慰問の素人淨瑠璃會は東京九重會、大阪八千代會の外、京都、鹿兒島、大分、岡山、福岡、下ノ關等各地の素義重鎮を招待し四月四日より三日間午前十一時より中津市蓬萊觀劇場にて賑々しく開催された。

(初日) (國民儀禮式) 寺子屋 (古城、長之助) 本下 (紅司、猿平) 白石 (操、道之助) 日向島 (津の子) 山名屋 (重司、稻丸) 河庄 (金聲、庄次郎) 忠九前 (千鶴、猿平) 同後 (桔梗、猿之助) 合邦 (巴、猿之助) …… 中入：鮎屋 (大彌、糸子) 三代記 (長登、長之助) 中將姫 (平茶、吉和) 引窓 (鶴峰、友造) 宿屋 (美峰、戰之助) 吃又 (タツミ、庄次郎) 陣屋 (信濃、稻丸) 安達 (利生、團友) …… (一日目) …… 御祝儀 (嘉若、龍光) 由良港 (房千代、糸子) 質店 (平茶、吉和) 沼津 (南風、吉之丞) 志渡寺

(鶴峰、友造) 壺坂 (美峰、猿之助) 岡崎 (信濃、稻丸) 新口 (利生、團友) 杏掛 (うろこ、稻丸) 寺子屋 (桔梗、猿之助) 中入：…… 本下 (大彌友造) 山名屋 (魚水) 紙屋 (操、道之助) 忠六 (九州翁、糸子) 陣屋、(龍鳳、萬八) 合邦 (出雲、友造) 岩井風呂 (生樂、稻丸) 鳴門 (操、友造) …… (三日目) …… 御祝儀 (津の子) 合邦 (長登、長之助) 十種香 (嘉若、龍光) 三代記 (稻雀、糸子) 饅頭娘 (タツミ、廣次郎) 彌作 (出雲、友造) 大文字屋 (生樂、稻丸) 寺子屋 (櫓、友造) 太十 (巴、猿之助) 逆櫓 (うろこ、稻丸) …… 中入：…… 組打 (大彌、德若) 妙心寺 (古城、長之助) 忠六 (紅司、稻丸) 引窓 (綱喜、廣二) 忠九 (鶴笑、德若) 橋本 (重司、稻丸) 岸姫 (千鶴、猿平) 近八 (金聲、庄次郎)

## 坂東勝治身振劇入

## 義太夫會

聲義會主催の百選會四月六、七日の後續いて素義有志が八、九の二日間坂東勝治、竹澤龍造合同一座の身振劇入義太夫會を開催。

(八日) 合邦 (喜城、猿喜知) 赤垣 (歸世花、團市) 辨慶 (美尙、美之助) 毛谷村 (叶、龜造) 太十 (錦志、猿清) 紙治 (彌聲、扇之助) 布四 (天昇、巴津昇) …… (九日) 陣屋 (壽光、團市) 太十前 (喜久壽) 同與 (扇華、扇之助) 玉三 (喜城、素八) 佐太村 (喜香、猿喜知) 先代 (里芳、勝助) 新口前 (一樂) 同與

(以與子、良造) 安達 (錦志、猿清)

# 豊竹猿春

公演

豊竹猿春公演の第六回は三月廿一日午後六時より蠶糸會館に於て開催。淨瑠璃の外小唄より四種、坂東勝治一座の淨瑠璃より二種が添えられた。

揚屋 (宮城野、巴龍。しのぶ、津賀重。絃、津賀昇) 合邦 (住若、清一) 戀十 (小津賀、紋教) 逆櫓 (猿春、三生) 小唄より四種 (延子、久子) 淨瑠璃より (先代、酒屋) 政岡 (勝治) おその (左喜昇) 三勝 (千代治) 半七 (勝治) 大夫、絃 (三勝清二)

## 東都 女義後援會

第廿六回を三月二十八日午後四時より並木俱樂部に開催。

大十 (駒榮、佳世子) 柳 (佳世子 三勝) 陣屋 (團蝶、猿幸) 赤垣 (小

和光、清三) 山名屋 (小津賀、紋教) 逆櫓 (佳仙、仙照) 紙屋 (重子、勝八) 寺子屋 (佳照、清一) 吃又 (猿春、三生)

## 正田大龍氏

### 追善義太夫會

昨春物故された正田大龍氏の爲め井上巽氏が發企人となり幹事三口松藤氏、世話人田中司若氏、外義松會一同が豊澤松造師後援にて三月二十一日午後二時より並木俱樂部で追善義太夫會を催ほして故人の冥福を祈つた。

初手向寺子屋 (松造、松四郎) 合邦 (巽、絃平) 鮎屋 (玉寶、松四郎) 壺坂 (松藤、松四郎) 十種香 (小六松四郎) 本下 (司若、松四郎) 安達 (松嘉、松造) 宿屋 (其角、松四郎) 酒屋 (綠、松造) 日吉 (清昇、綾柳) 十種香 (有明、松四郎) 堀川 (鯉昇松造) 陣屋 (一幸、松榮) 揚屋 (花玉、綾柳) 新口 (豊茂、松造) 先代

(登調、猿女) 辨慶 (越枝、松造) 大晏寺 (春和、絃平) 岡崎 (桔梗、綱助) 沼津 (高峰、松造) 大十 (光秀、有明) 十次郎、其角。初菊、小六。操、鯉昇。さつき、松藤。久吉司若。絃、松四郎)

### 女義若女會 會場淺草橋亭。

第四十二回三月十五日。日吉 (津賀重) 鳴戸 (素八、播磨一) 長局 (彌周、三生) 壺坂 (素次、素八) 寺子屋 (住若、清一) 第四十三回四月一日。柳 (津賀重) 安達 (素次、素八) 神崎揚屋 (小津賀、紋教) 野崎 (素八、播磨一) 引窓 (昇登、綱助)

### 鸚鵡會 三月二日その第二回を

日本橋俱樂部に於て開催好評を博した鸚鵡會は京都公演を企て京都に於ける第一回演奏會として竹本春太夫後援のもとに四月十五日午後五時より朝日會館にて華々しく開演する事となつた。岸姫 (昇登、綱助) 中將姫 (春華、清芳) 引窓 (土佐廣、綱助) 長局 (染登、猿幸) 酒屋 (小仙) 千本櫻道行 (總掛合)



